

国際的な資質を育成する社会科学習 (7)

— 思考の再構成を促す授業づくりを通して —

柳生 大輔 安松 洋佳 長野 由知 池野 範男
棚橋 健治 木村 博一

1. はじめに

現代社会は、国際化・高度情報化が急激に進み利害関係が複雑に絡み合い、問題解決が単純ではない社会である。現在既に有している知識の理解だけでは、目の前の社会事象や今後起こるであろう社会的な事象を捉えることは難しくなってくる。そのような中で、社会科学は、社会の変化に適応し、平和的な社会を築くことができる人材を育成していかなければならない。国際化や情報化が進展する中で、自己の思考をより科学的なものへと再構成し、自分なりに知識を構造化していく習慣や能力を身につけていく必要がある。また、正しい思考力・適切な判断力を持ち、他者・多国との価値観の違いを認め、お互いの関係を平和的に形成する資質も必要になる。21世紀を担う子どもたちのために育成したいこのような資質を「国際的な資質」として、『国際的な資質を育成する社会科学習—思考の再構成を促す授業づくりを通して—』という研究主題を設定している。

2. めざす子どもの姿と社会科で育成すべき力

2.1 めざす子どもの姿と思考の再構成

社会科において、正しい思考力・適切な判断力を育成するためには、知識を正しく理解する必要がある。正しい知識を持ち、その知識を体系的に関係づけることで、さらに広く深く正しい思考がなされ、適切な判断をすることができる。また、正しい知識・適切な判断ができることで、より一層正しい知識・理解が得られる。今後必要と becoming なのは「事実を正しく捉え→多面的に社会的な事象を考え→自主的・論理的に判断する」

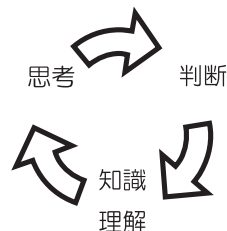


図1 思考の再構成のサイクル

活動を通して、自分の思考をより科学的なものへと再構成していくことである。また、この過程を集団討論や子ども同士の教えあいなど、他の人々と相互交渉するといった他者とのかわり、すなわち人間関係力を生かしながら行うことで、国際的な資質も高まっていくものと考えている。

2.2 思考の再構成を促すための方略

子どもたちが状況に応じて思考を再構成していくためには、学習の中で次のような手だてが必要と考える。

- ① 子どもたちの既有的知識・理解を揺さぶる学習内容と発問
- ② 新しい知識・理解体系を推理させる
- ③ 他者と自分の思考を比較させたり、自分の思考・判断過程を記述させたりする

上記手だて①②について、子どもたちの既知知識・理解による概念に変化が生じるためには、既知知識・理解の中に概念変化に必要な新しい概念がなければならない。この新しい概念は日常生活場面からだけでは獲得しにくいことが多い。自己の知識の不整合に気づいた後、いかに新しい概念に到達することができるかが、知識の概念変化をすすめるための鍵となる。一つの方法は、推理力を使うことによって、言い換えれば自分のよく知っている領域での知識を基にして、現在のよく分からない対象の性質を類推し、そこに新たな概念を見つける、というものである。もう一つのやり方は、後の学習や理解のかなめとなる重要な科学的概念を教師がヒントなどの形で提案し、それを学習者が使う機会を周到に用意することによってその概念の理解が徐々に深まることを期待する、というものである。その概念がくさびとなって、適切な学習内容と発問によって、後の知識の概念変化が容易になると考える。

Daisuke Yagyū, Hiroyoshi Yasumatsu, Yoshitomo Nagano, Norio Ikeno, Kenji Tanahashi, Hirokazu Kimura: Fostering competencies in global age through social studies (7): Focusing on reconstruction of learners' thinking in the class.

③について、思考の再構成を促すためのノートづくりにも取り組む。私たちは社会的事象と対峙する際、道具・記号といったものを仲立ちにして対象に向かい合っており、「主体-道具-対象」という三角形を一つの単位として扱う必要がある。人間の精神活動を考えたとき、この媒介物の道具の中で最も重要、かつ大きな貢献をしているのが言語である。その言語を使うことで、イメージの段階から関連化・抽象化という構造化段階を経て、論理展開を導き出すことにつながる。

3. 実践事例

3.1 小学校3年生実践事例

3.1.1 単元名

「ブラ★サンイチ～学校周辺地域の様子とその特色」

3.1.2 単元について

本単元は、3年生地域学習の導入に位置づき、生活科との接続期にあたる単元である。しかし、本校は校区が広域で、生活圏と学習の舞台にずれが生じやすく、その結果、学習の舞台となる地域についての知識が不十分になる傾向がある。そしてそのことが、後の地域学習において、地域の様子に基づいての具体的な話し合いを成立させにくい原因になっている。地域学習の導入単元として、学習の土台となることが期待されていながら、その機能を果たしきれていない現状がある。

そこで、地域学習の基盤となる基本的な地域の特色についての知識を保障できるような、町探検単元「ブラ★サンイチ」の計画を考えた。

3.1.3 思考の再構成を促す手立て

生活科との接続期にあたることを考慮し、子どもの感じ方や捉え方をもとに考えを広げさせ、一人一人が考えをもつことができる直接観察の場の工夫を講じることが必要であると考えた。

① 現在の土地利用の様子に着目させるために昔の住宅地図を持たせる

過去の地図には「映画館」「遊園地」といった魅力的な存在が記載されている。その事実が子どもの持つ知識を揺さぶり、現在の土地利用の様子の観察の視点になると考えた。本単元では、昔の地図（昭和40年）と現在の土地利用の様子を比較させた。

② 表層的な理解に陥らせないために高低差に観察の視点をしぼる

町探検を経て得られる知識を、地域の様子の背後にある理由とともに獲得させたい。そこで、町探検の際に、土地の「高低差」に着目させ、後の話し合いによって土地の様子と関連づけを図り、地域の特色を浮き彫りにすることを考えた。

図2で示すように、地域Aの町探検を経て浮き彫りになった特色は、地域Bを調査する際のものさしになり、子どもの中で比較・関連づけがなされると考えられる。なお、町探検の際には、高低差に気づきやすくするために、ビー玉をもたせて調査させることにした。

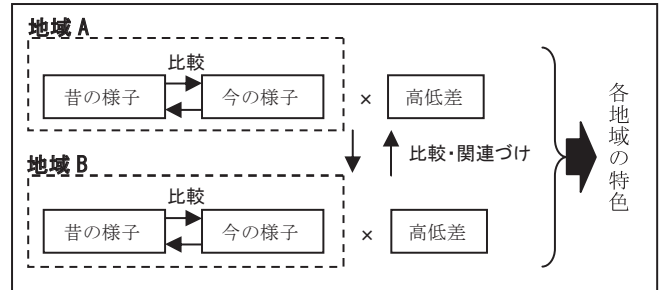


図2 地域の土地利用の特色を浮き彫りにするために

3.1.4 授業の計画

本単元は、地域の土地利用の様子の観察を通して、地域には特色があり、人々は生活に合わせて土地利用の方法を変えたり、土地を作ったりして生活していることを考えることが目標である。

子どもの利用頻度が比較的高く、生活科において共通して学習している駅の周辺地域を足がかりにして、土地利用の観察と話し合いをくり返ししながら、次第にその周辺地域に範囲を広げていくよう単元を構成した。

- 第1次 単元の計画を立てよう・・・2時間
- 第2次 ブラ★サンイチをしよう・・・10時間
 - ・ 駅周辺地域（館町・城町方面）をブラブラ（地域調査2＋話し合い1）
 - ・ 本町方面（西）へブラブラ（地域調査2＋話し合い1）
 - ・ 円一町・旭町のビデオブラブラ（ビデオ視聴1＋話し合い1）×2
- 第3次 地域を比べて話し合おう・・・2時間

3.1.5 授業の実際

ここでは、第2次の駅南側地域、本町地域における地域調査とその後の話し合いの様子を述べる。

第2次「ブラ★サンイチをしよう」

（1）駅周辺地域（館町・城町方面）をブラブラ

<地域調査>

駅の南口付近、駅の南側にある商店街で直接観察を行った。「平らだと思っていたけどビー玉が転がった。」「駅前には土が出ているところが少ない。」「昔の地図ともっと変わっていると予想していたけど、同じ所もあった。」などの反応がみられた。

<話し合い>

町探検での気づきの交流から、学習課題「どうして昔も今も駅の南がわにはおうちが少なくて店が多いのだろう。」が設定された。その中で、「高低差が小さくて、駅やバス停、タクシープール、港が近くにあって、人通りが多いからお店が多い」という結論になった。

(2) 本町方面 (西) ヘブラブラ

<地域調査>

本町の商店街、その北側の住宅地で直接観察を行った。商店街では、「駅前よりも道が細い。」「古いお店がたくさんある。」「車が多くて道をわたれない。」などの反応がみられた。北側の住宅地では、「駅前よりも高低差が大きく、ビー玉がはげしく転がった。」「お店がないのはどうしてだろう。」などの反応がみられた。

<話し合い>

町探検での気づきの交流を通して、学習課題「人は平らな方が好きそうなのに、どうして坂におうちがたくさんあるのだろう。」が設定された。

ここでは、比較的新しい町で住宅が集中している地域と比較・関連させながら話し合いを行った。前回に地域調査を行った駅南側地域の様子とも関連づけることで、「本町の南側にお店が多いのは人通りの多いところが近いためであり、その近くの急勾配の斜面に住宅が多いのは商店が多い地域に近いからだ。」、また、「駅周辺に宅地として利用できる土地が少なかったために、周辺地域の田畑が宅地になった。」と考えるに至った。

3.1.6 取り組みの調査について

単元前と単元後で、「学校周辺地域の紹介文」を書かせた。表1は記述を視点に沿って分類したものである(複数の視点にまたがる記述は複数に分類)。

表1 「学校周辺地域の紹介文」の変容

分類の視点	プレ	ポスト
具体的な地域名を挙げる	0	24
地形と分布を関連づけて言及	0	9
昔についてのみ言及	4	14
分布についてのみ言及	4	7
地形についてのみ言及	0	3
あるものについて言及	18	11
祭りなど文化について言及	5	3
その他	6	2

単元前段階では、地域にある物(目印になりやすい大型の商店や駅など)を紹介するものが多かったが、単元後では、地域名を入れて記述する子どもが増え、説明がより具体的になった。

しかし、「地形と分布を関連づけて言及」出来るよ

うなっているかということ、単元後でも9人であり、十分に関連づけて考えられているとはいいがたい。

3.1.7 成果と今後の課題

この取り組みを通して、子どもに地域の様子について具体的な知識を獲得させることができた。しかし、地形と分布の関係を考えるという点については十分とは言えない。これは、与えた住宅地図が子どもにとって難しく位置を把握しにくかったこと、また、歴史的アプローチと、地理的アプローチが混在し、学びが散漫になりやすかったことが原因であると考えられる。社会科入門期の学習の在り方として、さらに子どもなりのとらえを大切に授業づくりが求められる。

3.2 小学校第6学年実践事例

3.2.1 単元名

「今に伝わる室町文化」

3.2.2 単元について

室町時代は、「下克上」という言葉に象徴されるように、新しい勢力が勃興する時代であった。社会基盤となっている農業・手工業及び商業に従事する人々が、自らの権益を獲得し、また守るための動きが、武家による中央や地方の政権に影響を及ぼす様子から、この時代の農業・工業の技術の向上、生産の増大、海外貿易も含む流通の活発化を見て取ることができる。また、事象・人物に係る文献資料・文化財ともに特徴的なものが多く存在し、子どもたちにとってはより論証的に学ぶことができる時代である。現代の生活に連綿と引きつがれているこの時代の文化的変革とその要因を課題として意識することにより、歴史事象を自分に引き寄せてとらえ、創造的に問題を解決する中で新たな思考方法を養うことができると考え、単元を計画した。

3.2.3 子どもの実態

子どもたちは、古代の仏教文化から国風文化への変化、武家の文化の勃興などを学習し、政治的・社会的な要因が生活文化に反映されることを学習する中で、はるか昔の文化が現代の生活に影響を与えることに気づいていった。また、都と地方、貴族と庶民の生活を対比的にとらえる中で、その理由について考え、社会構造の課題としてとらえようとする児童もいた。

資料に触れさせる際には対比・関連づけ、分類・類推といった手法を活用し、論理的思考につながる展開とすることが効果的であると考えた。

3.2.4 思考の再構成を促す手だて

① 既存の知識・理解を揺さぶる

揺さぶりたい子どもたちの既存知識または素朴概念として、次の3点を想定した。

- a 「『権力者』の生活（文化）は豪華」
- b 「庶民の生活（文化）は質素（赤貧）」
- c 「『昔の文化』とは（寺院・遺跡、年中行事）など特別なもの（こと）のこと」

aについては、古墳やその副葬品、大仏の建立、寝殿造等の平安貴族の文化といった学習の中で視覚的、感覚的に獲得されてきていると考えられる。また、bについてはいわゆる「貧窮問答歌」や、平安時代の庶民の食事や衣服、家屋の復元図などからaと対比的に獲得されているものと考えられる。さらに、cについては、既習の内容に加えて修学旅行などの史跡見学の経験も影響していると考えられる。

これらの知識・概念に対し、次のような手立てで「揺さぶり」を行った。

- a 子どもたちの意識（「豪華絢爛」[例：「金閣」]）に沿わない例（「銀閣」[東求堂の内部]）や水墨画を示す
- b 庶民の食事の変化から、生産（物流）の活発化に気づかせ、「戦乱の時代」であることとの間に矛盾はないのか問いかける
- c 現代の生活の中に受け継がれる室町文化のすがたを「住、食、物流」の3点に見いださせる

② 批判・推理・判断の場面を設定する

本単元の学習を通して、子どもたちの知識・概念が再構築される過程を想定したものが次図3である。

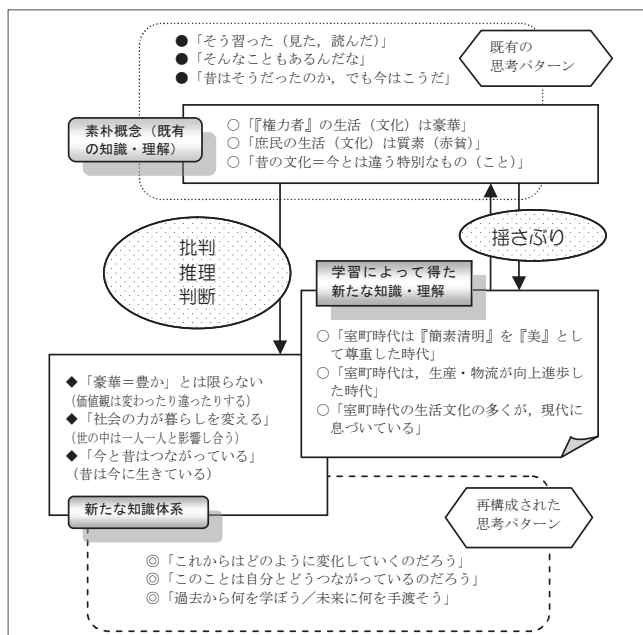
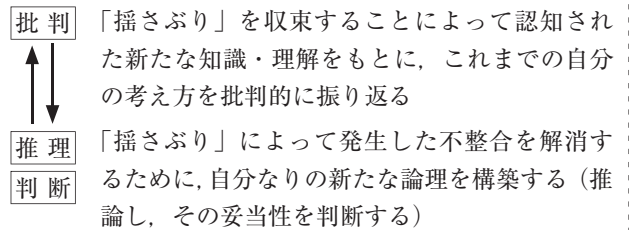


図3 本単元における「思考の再構成」

また、思考の再構成を促す新たな知識体系の構築を実現するための「批判」「推理・判断」については、学習の中に次のように位置づけることが有効であると考えた。



3.2.5 学習の実際

① 復元資料の活用による「揺さぶり」

室町時代の庶民の生活について学ぶために、中心となる資料として、広島県立歴史博物館の「草戸千軒町」の復元展示をスライドショーで提示した。

市場に並ぶ様々な産品に加え、各家の夕餉の膳（特に「ハレの日」の食膳）に対して「おいしそう」「思ったより豪華」「今の食事でもおかしくない」等、驚きをもった発言が見られた。既習の「貴族の暮らし」で平安時代の貴族の生活について学習した際に見た、平安時代の貴族の食事と庶民の食事との対比写真（手持ちの資料集に掲載）から抱いていたイメージとのずれが、「家は狭いのはどうしてこんな（に立派な）食事なのだろう」という疑問を子どもたちに持たせることとなった。

② 「推理・判断」と「批判的振り返り」

子どもたちに対して、「この食材はどのようにして手に入れたのだろう。」と問いかけ、自分たちの疑問（「揺さぶり」による不整合）を収束させる思考を促した。子どもたちからは当初、「家の人が自分で釣ったり取ったりした」「お店で買った」「交換した」といった考えが出されたが、「もう一度（復元展示室の）映像を見たい」という声上がり、再度の観察の中で、市場に見られる銭や、各家庭に見られる作業場の様子から「この人たちは物作りをし、それを売って儲けたお金で（食材を）買っているのではないか。」という考えが浮かび上がってきた。そこで、子どもたちに食材の一つとして昆布が見られること、昆布は瀬戸内海にはまず生息していないことを示したところ、子どもたちは「（物作りなどで）お金をもうけること」や「広い地域での品物の売り買い」がこの時代の庶民の間にあったのではないかという結論に達した。

この結論をもとに、学習を振り返ったところ「今までは人々はずっと貧しくて苦しい生活だったと思っていたけど、ちょっと違うなと思った」「昔の人も工夫

しておいしいものを手に入れていたのでびっくりした」などの概念変化や、「勉強してみた意外だった。ちゃんと調べるとおもしろいなと思った」「昔の人も意外に今の私たちと同じかもしれないと思って、ちょっと想像できるかなと思った」といった思考の変化が見られた。

しかし、思考する時間が十分でなかったり、言語表現がうまくできなかつたりして、「推理・判断」の段階まで思考を深めることができていない子どもも見受けられる。今後は、論理的な表現とその理解について、子ども同士の討論に依存するだけでなく、さらに実証的で平易な方法を検討する必要があると考えている。

3.3 中学校第9学年実践事例

3.3.1 単元名

「国民生活と政府の役割」

3.3.2 単元について

本単元は、国民の生活と福祉の向上をどのように図るのかということを追究するものである。具体的には、「社会保障関係費の財源を、消費税やたばこ税でまかなうことに、賛成ですか反対ですか？」の問いに関して自分の意見を論述し、仲間との交流を経て、わが国の将来像を考えるのである。そのためには、習得した知識や技能を活用し、事象間の関連を多面的・多角的に考察しなければならない。ねばり強く考えることで、いずれ社会を形成する市民として生活の改善や社会づくりなどに生かしていく力を育むことができる。

3.3.3 単元の目標

- 国民生活の向上をはかるためには、生活関連の社会資本の充実が大切であることを理解する。
- 統計や資料をもとに、租税のしくみや特徴にふれ、租税の果たす役割について理解する。
- 社会保障制度の基本的な内容とわが国の現状を知り、今後の福祉政策の方向性について考える。
- 日本の財政（特に社会保険制度）がかかえる問題点の解決策として、消費税やたばこ税の増税の妥当性を考える。
- 学習した内容を仲間と交流することで、日本の財政がかかえる問題点の解決策について、自分の意見を再構成し、将来わが国の福祉政策がどのようになるのか具体的に考える。

3.3.4 思考の再構成を促す手だて

教師の役割として、社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させることはもちろんのこと、習得した知識や概念を使って事象間の

関連を生徒に考えさせる場面を設定し、発問によって、事象の見方・考え方には複数の視点があることを的確に伝え、生徒に思考の再構成を促すことが重要である。本単元は、生存権の観点から社会保障の充実が必要なことだが、社会の少子高齢化が進み国の財政も厳しいので、年金や医療のための財源不足を早急に解決しなければならない、という政治に要求されている課題の解決に向けて探究活動を行うものである。その時に、生徒から出された消費税の増税への賛成・反対意見に対して、例えば消費税の背景（事象の特色）をつかんでいないような場合に、思考の深まりを促すような発問を生徒に投げかけたり、あるいは事象間の関連付けが弱い場合には、税の公平性や財政との関わりといった別の視点を提示したりすることで、生徒の思考を的確に揺さぶり、再構成を行わせる役割を教師は担わなければならない。

3.3.5 授業の実際

授業構成は、全6時間とする。第3時間目の「習得・活用」を中心とした内容理解、および第6時間目の自分の考えを仲間と交流して、自分の考えを再構成する学習の流れと生徒の記述を記載する。

第1時 政府の仕事と租税
第2時 財政のはたらき
第3時 社会保障と国民の福祉
第4・5時 日本の財政問題を考える
～消費税・たばこ税の増税の視点から～
第6時 日本の将来は明るいかな？

【第3時間目「社会保障と国民の福祉について」】

- 授業の流れ
- ① 日本の社会保障制度にはどのようなものがあるか資料をもとに理解させる。
- ② 社会保障制度の成立を歴史的に理解させる。
- ③ 社会保険のしくみを理解させる。
- ④ 社会保障関係費に関する種々のグラフの読解。
- ⑤ 高齢者の退職後の生活資金について、国民年金を例に理解させる。

【第6時間目「日本の将来は明るいかな？」】

- 授業の流れ
- ① 社会保障関係費の財源を、消費税やたばこ税でまかなうことに、賛成か反対か、理由とともに説明できるよう準備させる。
- ② 班の中で意見交流をさせる。
- ③ 自分の論述した内容を再構成させる。
- ④ 自分の論述内容をもとに日本はどのような社会になるべきか考え、ワークシートにまとめさせる。

《日本はどのような社会になるべきか》より一部抜粋

(大きな政府に賛成)

・貧富の差や地域格差が拡大してはならないと思う。日本の歴史的背景からも分かるように、貧富の差が生まれ、金持ちなどが出てくると、貧しくなった人々を奴隷のように扱い、不平等な人間関係が生まれる。また、日本の税金の使い方や、無駄使いが気になるので、分散国家など権力を地方に移し、税金がほぼ地方に行くようにすると思う。一番良いと思うのは、駅や学校などを私企業などにして公共として考えない。税金をカード化して、自分の職にあったカードを選ぶ。例えば、移動が多い職の人は、自分の払った税金を乗り物に割り当て乗り物はタダ。主婦は食品の税に割り当てるなど。

・貧富の差がなくなり、どんな人も幸せになれると思うからです。スウェーデンも税率25%で成り立っているし、小さな政府だと、貧しい家庭に生まれた子は学校に行けないなど、問題が起こると思うので、税の負担があったとしても大きな政府が良いと思います。

・小さな政府になると貧富の差が拡大し、お金を持っている人たちが、お金が回るようになり、その他の人は、あまりお金が回らないから、中小企業などが大手の企業に負けて倒産してしまうから、それよりは税金を皆で負担し、貧富の差を少なくすれば平等にチャンスがあり、お金が回ることで景気が良くなると思うから、こちらを選びました。

・…貧富の差が拡大するより、みんな平等であった方が良いと思います。僕の思うことは、規制はあっても良いと思います。安全性がどうかというより、最終的には消費者が決めることだと思うからです。なので規制がある大きな政府が良いと思います。

・小さな政府にしてしまうと、貧富の差が広がり、都会とその他の格差がさらに広がってしまうからです。そうすると、医療のサービスなどをともに受けられない人も増えて犯罪などが増加してしまうことも考えられるからです。

(小さな政府)

・大きな政府だと貧富の差がなくなり、みんなに行き届けれど、日本の経済発展に目を向けると小さな政府でないと成長しないと思うからです。色々な企業で競争しあいながら工夫していった方が良いと思います。

・国民の負う税は軽くなるというが、現在の不景気な日本国民にとっては嬉しいと思った。また社会資本が充実しないことで、税金を使う無駄や必要のない公共事業が減ると思った。いちいち色々な機関を通して税を払う無駄がなくなるし、必要な企業は私営として復活すると思うから。

・税金が少なくなるため、生活が少し楽になります。そして規制緩和により、国による圧力がなくなるため、企業が自由に事業を行うことができます。そうすることで、競争する企業が増えるため、自分の利益を上げようと経済の発展につながっていくと思うからです。

・小さすぎるのは良くないが、ある程度は小さな政府の方が良いと思う。理由は、目的以外のものに使われている可能性があるような税金は減らし、負担を少なくするべきだと思うから。また、あってもなくてもいいようなサービスは減らした方がよいと思う。しかし、目的がきちんとある税金をたくさん払うのなら大きな政府の方が良いと思う。

・特に今地方選でよくうたわれている地方分権や減税、また多くのグループを民営化することで政府の存在感をより薄くし、地方、国民の自立を促すべきであると思う。

(その他)

・最初に大きな政府、次に小さな政府にして、1年交代が良いと思います。なぜなら、大きな政府の長所も、小さな政府の長所も取り入れることができ、互いに出る短所を交代した次の政府の長所でカバーできるからです。もし、片方なら重い税もしくは貧富の差という大きな課題が生じ、短所がものすごく悪化するからです。

・どちらも良い、悪いところがあるから、両方まぜるべきだと思う。規制をなくして良くなるものは規制をなくすべきだと思うけど、医療などは規制をはずさずすべての人が平等に受けられるようにするべき。外すのと外さないものともバランスが大切だと思います。

・どうやってもお金がかかりすぎるなど政府がやって、他の事はなるべく規制緩和して小さな政府にしていくべきだと思う。その方がどこに使われるかわからない税を払うよりも自分で見えている方が納得しやすく、結果的に国民の不満も少なくなると思うから。

3.3.6 授業を終えて

本単元の学習を通して、少子高齢化の到来によって、公的年金の支出増とそれを支える財源不足の解決策として増税の必要性を判断するために、さまざまな資料を適切に選択・活用し、探究した結果を文章にまとめ、仲間と交流して自分の考えを再構成し、将来わが国の福祉政策がどのようなになるのか考えることができた。公民的分野の学習内容は、今私たちの生活している世の中と最も密接につながっている。習得した知識、概念や技能を活用し、探究することによって、事象の特色や事象間の関連を説明できる力が身につく、そのことで現実の社会がわかり、生徒自らが公共的な事柄に参画していこうという、市民としての資質を獲得することにつながるのである。

4 成果と課題

「揺さぶり」によって子どもたちの知識や概念に不整合を発生させることで、自分なりの新たな論理の構築を促すことができた。

また、子どもの感じ方や捉え方をもとに考えを広げさせ、一人一人が考えをもつことができる直接観察の場の工夫や認知された新たな知識・理解をもとに、これまでの自分の考え方を批判的に振り返る活動、そして習得した知識、概念や技能を活用し、探究する活動を通して、社会科学習の基盤となる基本的な知識を主体的に獲得したり、子ども自らが公共的な事柄に参画していこうという資質を獲得したりすることにつながる学習を展開することができた。

一方で、資料(事象)の意味や、他者の論理を十分に把握できなかったり、自分の考えを論理的に表現できなかったりといったことが影響して思考を十分深めるに至らない子どもも見受けられる。今後は小中一貫の環境を生かして学習材や学習テーマを絞り込み、系統的な授業開発に取り組むことも必要であると考えられる。

参考文献

- 1) 柳生大輔 安松洋佳 長野由知 池野範男 棚橋健治 木村博一「国際的な資質を育成する社会科授業(6)―思考の再構成を促す授業づくりを通して―」、『広島大学学部・附属共同研究紀要』、第39号、2010、pp.219-224
- 2) 稲垣佳世子『新訂 認知過程研究―知識の獲得とその利用―』、報道大学教育振興会、2007
- 3) 佐藤公治『認知心理学からみた読みの世界―対話と協同学習をめざして』、北大路書房、1996